

今週の為替相場見通し(2021年8月16日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		109.55 ~ 110.80	109.61	109.00 ~ 111.00
ユーロ	(ドル)		1.1706 ~ 1.1804	1.1794	1.1690 ~ 1.1890
(1ユーロ=)	(円)		129.24 ~ 129.80	129.29	128.30 ~ 130.30
英ポンド	(ドル)		1.3791 ~ 1.3905	1.3868	1.3750 ~ 1.3900
(1英ポンド=)	(円)	*	151.93 ~ 153.32	151.98	151.00 ~ 153.00
豪ドル	(ドル)		0.7316 ~ 0.7389	0.7377	0.7250 ~ 0.7450
(1豪ドル=)	(円)	*	80.71 ~ 81.58	80.80	80.00 ~ 82.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 山岸 寛昭

(1)今週の予想レンジ: 109.00 ~ 111.00 円

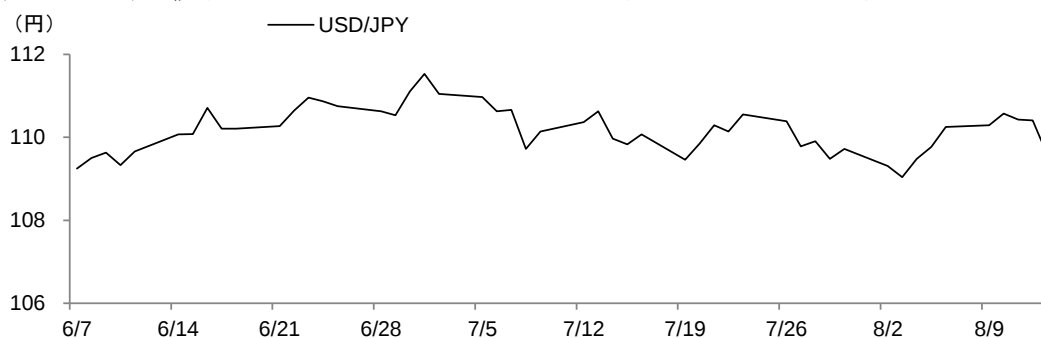
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は、週後半に下落する展開。東京市場祝日の9日、110.25円付近でオープンしたドル/円は、新型コロナウイルスのデルタ株の世界的な拡大が嫌気されると、リスク回避の動きが強まり一時110円付近まで下落。その後、ボスティブ・アトランタ連銀総裁が「比較的早期のテーパリングを支持」と述べたことでドル/円は小幅反発。翌10日、ドル/円は110円台前半での揉み合い推移となったが、海外時間に米株や原油価格が上昇に転じ、リスク選好の流れが強まる中、インフラ投資法案の上院可決をきっかけに110円台半ばまで上昇。11日、ドル/円は米金利の上昇を受けてじり高となり、一時週高値の110.80円をつけた。海外時間では、注目された米7月CPIがほぼ事前予想通りの結果にインフレ上昇率が鈍化したとの見方が広がり、米金利低下も相まって110円台前半まで反落。12日、ドル/円は前日からドル売りが一巡した後は、新規材料に欠けて110円台半ばを中心に20銭程度の狭いレンジでの値動き。13日のドル/円は、米8月ミシガン大学消費者マインド指数が市場予想を大幅に下回るとドル売りが加速し、一時週安値109.55円まで下落、109.61円で越週した。

今週のドル/円は堅調な推移を予想。今月発表された米7月雇用統計が強い数字となり、その後FRB高官から早期テーパリングを示唆する発言が相次いだことを受けて、今月26日(木)～28日(土)開催のジャクソンホール会議でパウエルFRB議長がテーパリングに踏み込んだ発言をするとの見方が出ている。それ以外の雇用関連指標も堅調な内容が多く、米雇用情勢の回復が危機対応の金融政策からの早期正常化を後押しする材料となりそう。早期テーパリングへの期待感と米金利上昇観測に支えられて、ドル/円は堅調な地合いを予想する。先週10日(火)にはインフラ投資法案が上院で可決、上院では続いて子育て・教育支援や気候変動対応の財政支出案に着手しており、一連の政策も米景気とドル/円のサポート材料となりそう。今週予定される経済指標では17日(火)発表の米7月小売売上高に注目。また来週のジャクソンホール会議を控えて、18日(水)公表のFOMC議事要旨(7月会合分)にも関心が集まる。声明文はテーパリング開始に向けて前進を確認する内容となっており、具体的にどのような議論があったのか注目したい。一方足元では、デルタ株による新型コロナ感染者数が増加し、経済活動へ与える影響が懸念されている。リスクシナリオとして、高値圏にある株価調整などをきっかけにリスク回避の円高が進む可能性あり、8月は円高に振れやすいというアノマリーとあわせて留意しておきたい。

(3)先週までの相場の推移

先週(8/9～8/13)の値動き: 安値 109.55 円 高値 110.80 円 終値 109.61 円



2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 甲斐 貴之

(1) 今週の予想レンジ: 1.1690 ~ 1.1890 128.30 ~ 130.30 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は上値の重い推移が続いた。週初9日、1.1750でオープンしたユーロ/ドルは前半、動意薄で方向感なく推移していたが、後半にかけて米金利上昇を受けたドル買い圧力に押され1.17台前半まで軟化した。10日、ユーロ/ドルは1.17台半ばでの小動きだったが、欧州時間に発表の独8月ZEW景気期待指数が事前予想を大幅に下回ったことからユーロ売りが強まったほか、米金利上昇によるドル買いが継続し1.17台前半まで下落、その後も軟調地合いとなった。11日、ユーロ/ドルは米7月CPIの発表を控える中、1.17台前半からじり安の展開となって、一時週安値の1.1706をつけ年初来安値に迫るも、その後に発表された米7月CPIの結果を受けてドル売りが加速し、1.17台半ばまで値を戻した。12日、一時米7月PPIの結果を受けてドル買いが進むも、新規材料に乏しく1.17台前半での狭いレンジでの推移となった。13日、東京時間では1.173から1.174の小幅なレンジで推移していたものの、欧州時間入り後から上昇に転じ、ユーロ圏8月貿易収支が市場予想を大きく上回ると、1.176台まで上昇した。その後も、米8月シシガン大学消費者マインド指数が市場予想を大幅に下回ると、1週間ぶりの1.18台を回復し、1.1794で越えた。

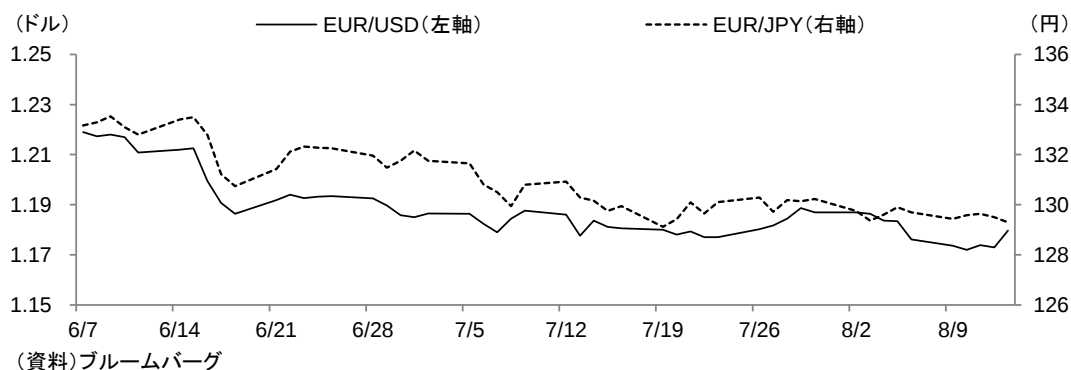
今週のユーロ相場は引き続き、上値の重い展開を予想する。先週は米8月シシガン大学消費者マインド指数が市場予想を大きく下回ったことで、それ以前の良好な米経済指標や度重なるFRB高官のタカ派発言等で高まっていた米国のテーパリングへの期待値を戻す展開となった。ECBのスタンスは大きく変わっておらず、デルタ株が蔓延し、経済の再度の停滞が懸念されていることは各国共通である中、金融緩和の出口戦略に関する当局のスタンスの違いが、引き続き、各通貨の強弱に影響を与える状況下にあると思われる。来週に8月ジャクソンホール会議を控える中で、米国のテーパリング期待の再高まりには留意したい。今週の主な経済指標として、17日(火)にユーロ圏4~6月期GDP(修正値)、英7月失業率、英7月失業保険申請件数、18日(水)にユーロ圏7月HICP(確報)、英7月CPI、20日(金)に独7月PPIの発表が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/9~8/13)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1706 高値 1.1804 終値 1.1794

(対円) 安値 129.24 高値 129.80 終値 129.29



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1)今週の予想レンジ: 1.3750 ~ 1.3900 151.00 ~ 153.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、小動き。対ドルでは、週前半に軟調、11日に反発、12日に急反落、13日に再び反発と細かい上下動を見せたが、12日の急落以外は、ほぼドル側の要因による値動きに見えた。並行して、対円、対ユーロでは、方向感に乏しい膠着の先行から、12日以降取引水準を切り下げ。つまり、12日はポンド全面安で、ここにはなんらかのポンド売り要因の存在が考えられた。週明け以降のドル全面高先行は、引き続き、6日発表された米7月雇用統計の上振れを好感したドル高と考えられた。11日のドル全面安は、逆に、同日発表された米7月CPIが「概ね市場予想通りだった」ことに対する反応と受け止められた。過去3か月、同指数は市場予想を明確に上振れてきたが、7月の数字が上振れなかった事実が、「物価の天井は近い(既に打ったのでなければ)」との思惑を広げたという解釈。13日のドル全面安も、値動き(タイミング)から判断して、ミシガン大学8月消費者マインド指数暫定値の下振れに伴う米長期金利低下を嫌気したドル売りと考えられた。肝腎の、12日のポンド全面安の要因だが、残念ながら、これと言って決め手になるようなものは見当たらなかった。同日には、英4~6月期GDP暫定値、英6月月次GDP、英6月製造業/鉱工業生産、同貿易収支などの幅広い英経済指標の発表があったものの、概ね、市場の予想に沿った内容で、特にこれと言って目を引く数字があったとも思われなかった。

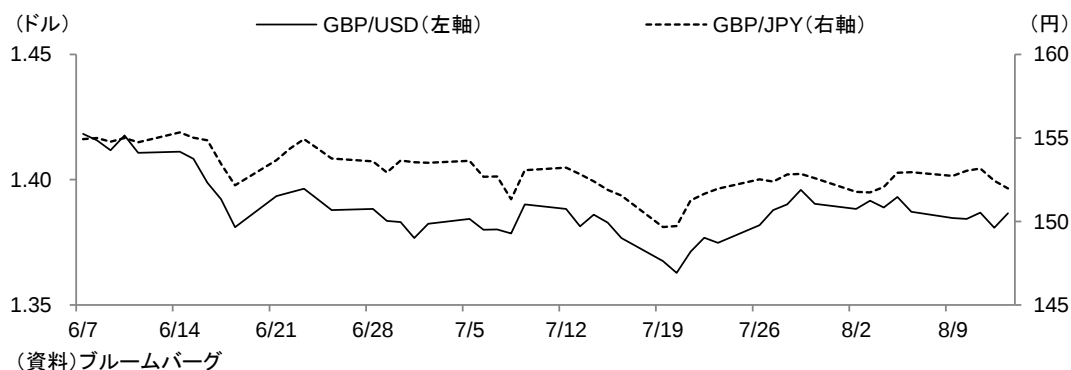
今週の英ポンド相場は、方向感に乏しい膠着の継続を予想。仮に値幅が出るとしたら、ポンド安方向を警戒する。上述の通り、この間、主要通貨市場の値動きのほとんどは、ドル側の要因=米連銀金融政策動向を巡る思惑によるものだった。今後も、そのような状態は当面続くのではなかろうか。市場では、同銀による資産購入規模縮小(テーパリング)開始の時期に関し、早ければ8月26~28日のカンザスシティ連銀主催の経済シンポジウム(ジャクソンホール)において、なんらかの示唆がある可能性が注目されている。目先の膠着を見込むのは、実際にジャクソンホールからの結果を確認するまでは、市場も腹を固められないと考えるから。地区連銀総裁や、他の理事が何を言おうと、市場は、パウエルFRB議長自身の口から、テーパリング開始の示唆が聞かれることを(或いは聞かれないことを)待っているのではない。ポンド安を中心にみるのは、12日のポンド全面安の要因が、未だにわからないから。こうした値動きは、往々にして、(相応の理由があったとしても)買い上げ過ぎた通貨の持ち高調整である可能性が高い。過去2週間を振り返ると、円やユーロがドルに対して明確に水準を切り下げる値動きが先行するのと並行して、ポンドだけは緩やかな下押しにとどまっていた。その結果、対円や対ユーロでポンドは水準を切り上げたわけだが、12日以降は、その流れが逆転している(円やユーロが対ドルで明確に反発したのに対し、ポンドの反発は限定的だった)。とりわけ、6日のドル上昇局面で、17か月ぶりの安値を更新したユーロ/ポンド(ポンドの高値更新)が、12日以降、従前の直近安値(ポンドの高値、今年4月5日の0.8472)を再び回復してしまっている値動きが気になる。勿論、17日(火)の英7月雇用統計、18日(水)の英7月CPI、20日(金)の英7月小売売上高などの英経済指標が、余程驚きを伴う数字だった場合は、その数字に素直な反応も想定できるだろう。そうでないのなら、目先、特段の新規材料も期待できない環境で、ここからもう一度ポンド買いの勢いを盛り返す展開よりは、今暫く、買い過ぎたポンドの調整的な売り戻しが続く可能性の方が高いように思われる。

(3)先週末までの相場の推移

先週(8/9~8/13)の値動き:

(対ドル) 安値 1.3791 高値 1.3905 終値 1.3868

(対円) 安値 151.93 高値 153.32 終値 151.98



4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 天雲 遊也

(1) 今週の予想レンジ: 0.7250 ~ 0.7450 80.00 ~ 82.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは方向感に欠ける展開となった。週初9日0.7336レベルでオープンした豪ドルは、一時0.7360近辺まで上昇するも、米金利上昇やボスティブ・アトランタ連銀総裁のタカ派寄りの発言を受けてドル/円が上昇する展開から、0.7330近辺まで下落。10日は、オープン後、豪センチメントの悪化が嫌気され一時週安値である0.7316をつける。その後も米株が上げ幅を拡大する動きや、米インフラ法案が上院を通過したことをきっかけにドル円が上昇する中、豪ドルは0.73台半ば近辺で上値重く推移した。11日は、米7月CPIがほぼ予想通りの結果であったが、インフレの減速が意識されたためかドル円が米金利の低下も相まって下落する動きに、豪ドルは急伸し一時週高値である0.7389をつける。12日は、米7月PPIが予想を上回る結果にCPI発表後のドル売りが一服したことから豪ドルはじり安の展開に。13日は米8月ミシガン大学消費者マインド指数が市場予想を大幅に下回ると米金利の低下とともにドル売りが加速しドル/円が110円を割れる展開から豪ドルは0.7381まで上昇し、0.7377で越週した。

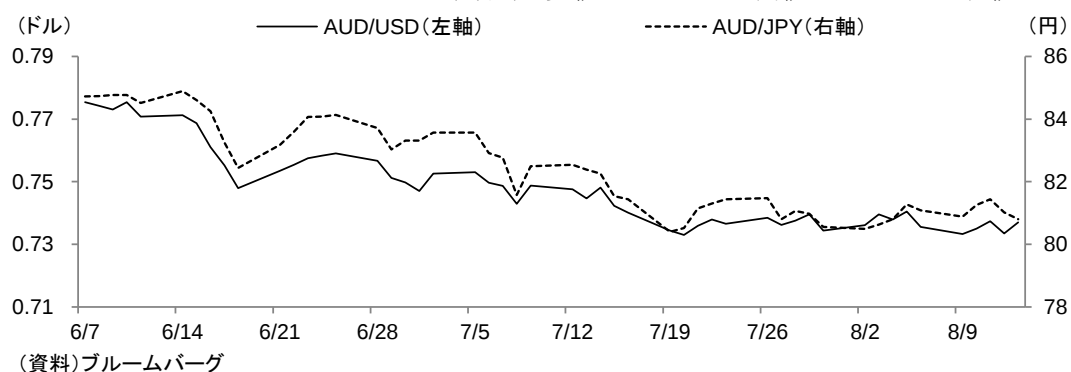
今週の豪ドル相場は上値の重い展開を予想する。世界的にコロナウイルス変異株の感染拡大が懸念されている中、豪州では首都キャンベラがロックダウンに入り、一部の地域では厳しい行動制限となっており、経済活動の正常化への懸念が再燃している。また、米国では労働市場の改善からFed高官からタカ派寄りの発言が相次いでおり、今月末のジャクソンホールでの会合まではテーパリングの議論開始期待からドル円は底堅く推移すると予想される。係る状況下、豪ドルの上値は限定的になるだろう。尚、経済指標としては17日(火)のRBA議事要旨、18日(水)の7月ウェストバック景気先行指数、NZ金融政策会合、19日(木)の7月雇用統計が注目される。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/9~8/13)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7316 高値 0.7389 終値 0.7377

(対円) 安値 80.71 高値 81.58 終値 80.80



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。